

森林整備事務所情報!

早生樹の研究 ～センダン・コウヨウザンの取り組み～

○早生樹への期待

滋賀県内でも多くの人工林が伐期を迎え、再造林をどのように進めていくかが課題になっています。省力化やコンテナ苗などが話題になっていますが、最近のバイオマス燃料用の需要の拡大や短伐期で収穫ができる、早生樹種にも注目が集まっています。

これまでも、ヤナギ属、ユーカリ属などの成長の早い樹種の短伐期施業の試験が行われてきました。樹種の選択だけでなく、スギ・ヒノキ等の成長を促すために林内施肥なども行われてきました。しかしながら、これらの取り組みから良好な結果は少ないようです。

○近頃の取り組み

近年、これまで早生樹としての注目が少なかった「センダン」「コウヨウザン」などの樹種について、有用な木材としての価値と体系的な施業方法の整理がなされ、多くの情報が提供されています。

センダンを家具などの製品に利用してきた九州地方では、通直な樹幹に仕立てる取り組みが行われています。その結果、センダンの生育特性を生かして、生育の初期段階での芽欠きと枝打ちを行うことで、通直の樹幹に仕立てる管理技術について、熊本県林業研究指導所から「センダンの育成方法」(※1)として報告されました。また、コウヨウザンについては、大分県農林水産研究指導センターから同じように施業の手引き(※2)が発行されています。

(※1) 熊本県林業指導所発行『センダンの育成方法』

(※2) 大分県農林水産研究指導センター発行『早生樹を用いた短伐期林業の手引き(コウヨウザン、チャンチンモドキ編)』

○中部森林での取り組み

中部森林整備事務所では、早生樹の可能性を検証するため、日野町熊野地先に2017年に「センダン」「コウヨウザン」の生育試験地を設け、必要な施業を行い生育状況の調査しているところです。



試験地は16mの方形で、試験地の周辺でも鹿による食害があるため堅牢な保護柵も設置し、センダン21本、コウヨウザン21本、対照のためスギ7本を2m間隔で植栽しました。今回は、速報としてセンダンの生育状況についての報告です。

下に、植栽から2年間の樹高・根本径の推移を示します。平均樹高が約2年間で0.5mから2.7m(最大で3.5m)に成長、対照として植えたスギの0.5mから1.1mに比較して初期成長が優れているのが計測されました。また、熊本の報告には条件が良ければ初期段階では、年間に樹高2m以上の旺盛な成長が示されていますが、熊本よりも寒冷なこの地でも相応の生育状況を確認することができました。

| 測定項目 | 樹種\調査日 | H29.12.21 | H30.10.9 | R1.8.22 | R1.8.22 (最大値) |
|---------------|--------|-----------|----------|---------|------------------|
| 樹高平均 (mm) | センダン | 551.4 | 1,012.9 | 2,743.9 | 3,460.0 |
| | スギ | 565.0 | 723.8 | 1,147.5 | 1,320.0 |
| | コウヨウザン | 436.9 | 661.7 | 1,053.0 | 1,440.0 |
| 根本径平均 (mm) | センダン | 7.54 | 19.37 | 31.45 | 46.20 |
| | スギ | 4.49 | 8.75 | 14.60 | 17.50 |
| | コウヨウザン | 6.21 | 10.50 | 14.75 | 23.30 |

樹種別 平均樹高根本径の推移

これからも、「センダン」「コウヨウザン」の継続調査を行い、この地域での適応状況を報告していきます。併せて、他の早生樹種・有用広葉樹の情報提供や再造林に関わる技術的なアドバイスなど地域に提供していきますのでご期待ください。



センダンは、初夏には公園や河畔林などで、薄紫の顆粒状花が風になびく風情のある情景を作ってくれます。自然状態のままでは、ほうき状に枝を広げた樹形になる傾向が大きいです。(寺尾)

特殊伐採という仕事をご存じでしょうか。最近、テレビでも紹介されるようになりましたが、神社などの巨木に登り、枝や幹を樹上で伐採する作業を特殊伐採と言います。今回、注目するのは湖東地域の木材会社で主にこの特殊伐採という作業を担当されている宮崎真(みやざきまこと)さんと神門徹(こうどとおる)さんです。

宮崎さんは30代、神門さんは40代と若い方ですが、これまで国宝文化財の社や寺院に隣接する巨木の伐採等高度な技術を要する作業現場、広くは岐阜、兵庫、九州などへも出向いて特殊伐採作業をされています。特殊伐採の現場は、大体狭く重機を使用できず倒す方向や伐採した丸太を下ろす方向に制限があるなど条件の厳しいことが多く、幹回りが6m近い巨木の伐採もチェーンソーの他はロープや滑車、ポータラップを用いて、ほとんど人力で作業されたこともあるそうです。このほか特殊伐採には一般的な林業では用いない道具や装備があり、三本爪のスパイクを両足に付けて木を登ったり、腰ベルトではなくツリーモーションハーネスという木に登る専用の安全帯(レスキュー隊がヘリからの降下に着用しているものと同じタイプ)を用いています。チェーンソーはガイドバーが通常に比べ厚みが薄く刃も小さいものに替えら

れ、エンジンの小型化の工夫がなされています。樹上で巨木の幹を切断しロープで吊り下ろす作業の状況をお伺いすると、その見事な技と豪快な様子に圧倒されますが、同時に大変危険な作業だろうと感じます。安全対策について、宮崎さんは「どれほど準備しても安全に100%は無い」、神門さんも「先の先を考えて安全対策をし、互いに注意する」と、怠りがありません。実際の伐採作業では切断された丸太がどう動くか、どちらに力が働くのか、事前に調査予測し安全対策を重ね作業を進めているそうです。これからも、台風による被害木の処理や手入れの遅れにより大木、老木となった境内や住家近くの危険木処理など、特殊伐採作業の場は無くなることはありません。

宮崎さん、神門さんには、安全で高度な特殊伐採技術者として、また、地域林業の指導者として、今後、さらにご活躍されることを期待しています。(堺)



地域経済、林業の活性化を！『東近江市木を使うプロジェクト推進協議会』

戦後の造林事業で多くの人工林が植林された東近江市の森林は成熟期を迎えています。東近江市で生産される木材の多くが県外大型加工施設に流出し、また安価な輸入材の利用が増加し、地域経済の発展に十分に結びついていません。一方、かつては暮らしや生業の様々な場面で木材をはじめとする森林資源が資材や燃料などに利用されてきましたが、生活様式や価値観の変化により、プラスチックや石油製品などに置き換わりました。

こうした中、昨年度から活動している「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループの意思を受け継ぎ、東近江市を中心とする地域の森林・林業関係者が集まり、木のある暮らしを提案するとともに、日常生活や事業活動のあらゆる場面で木が使われるような活動を展開し、地域の資源や資金が地域で循環する仕組みを構築する

ことを目的として、令和元年5月27日に「東近江市木を使うプロジェクト推進協議会」(会長 川村克己)が正式に発足しました。この協議会では、東近江市産木材を利用した内装材、家具、玩具、生活用品などの製品を開発し、日常生活や事業活動などあらゆる場面で使用していただくとともに、木育を普及啓発することにより、地域経済の活性化、林業の振興、森林の保全を目指して活動しています。(東近江市木を使うプロジェクト推進協議会事務局 土田)

問い合わせ先

東近江市山上町 3544(東近江市永源寺森林組合内)

kiwotsukau.p@gmail.com

